

「角山ゼミナール課外授業 〈生誕100年朝倉摂展〉鑑賞／女性画家の好奇心と信念に触れて」

国際日本学部 国際文化交流学科 3年

太田 千翔子

ゼミナールでは、講義の一環として、実際に美術館に出向き作品の鑑賞を行った。我々は、5月14日に神奈川県立近代美術館葉山で開催された「生誕100年朝倉摂展」を訪れた。この展覧会は、画家・舞台芸術家として活躍した朝倉摂の初の回顧展である。初期の日本画から戦後の印象画の時代を経て、舞台芸術や絵本・小説の挿絵など多岐にわたる作品が時代の変遷とともに展示されていた。展覧会では、絵画作品を通して、当時の時代背景や朝倉摂自身の人生を感じ取ることができた。また、絵画作品だけでなく、素描や舞台模型、デッサン画といった、作品が出来上がるまでの過程部分も見ることができた。全体を通して、とても見応えのある展覧会であった。

まず、朝倉摂の作品を見て一番驚いた点は、時代とともに大きく変化する作風であった。複数の画家の作品を見て回る中で、まるで複数の画家が描いたと分から

ないほど、タッチや描くモチーフが生涯を通して変化していると感じた。良い意味で固定の作風や絵の癖が見られないとも思つた。特に、絵本の挿絵や舞台美術の分野では、どれも作家や作品の持つ世界観にぴったり合う画風で描かれている点に感動した。

また、1日1枚、欠かさずスケッチを行っていたことや空間把握能力の高さによりデッサンがとても上手いという印象を持った。写生の技量の高さのおかげで、繊細な線で描かれた日本画はより洗練されて見えた。そして、戦後に描かれた印象画のような作風の時代もどこかリアルさが残るものになっていた。

私自身が聞かれて一番悩むのは、この展覧会の中で、一番印象に残った作品は?という質問である。その理由は、本展覧会では、何か一つの目玉作品を目立たせて見せるのではなく、全体の変化や作風の違いを際立たせるように作品が展示されていたからである。ここからは、章ごとに作品の印象について感想を述べていく。



神奈川県立近代美術館葉山館の外観

第1章の入り口すぐのところに展示されていたのは、初期の作品である大きなキャンバスに描かれた日本画であった。「更紗の部屋」、「歓び」と題された作品は、どれも日本画ならではの美しさ・繊細さと女性たちの可愛らしさ、日本画なのにどこかポップな色合いが印象的だった。大きい作品にもかかわらず、人や自転車のバランスは正確に描かれていた。一方で、デッサンとは異なりどこかデザイン性を感じるタッチでこれまで見たことのない作風であった。全部の章を見終わった後に振り返ると、一番色合いやタッチが初々しく、明るさや弾けるようなみずみずしさをより感じた。朝倉摂が社会の矛盾や戦後の暗い状況など様々な苦悩や問題に影響を受ける前の絵画として、彼女が純粹に

描きたいものを描きたいように、その中でも女性たちの素朴でありのままの美しさを描きたいという思いが汲み取れた。

第2章はメッセージ性が強く、荒々しく、暗めの色彩の作品が多く見られた。この章の作品を鑑賞して、感情が大きく揺さぶられた。そのため、戦後の大時代に絵画を通して、社会全体に問題提起を投げかけようとしていたのではないかと感じた。また、社会の現実や悲惨な出来事（戦後の日本社会に蔓延る差別や貧困といった問題）から目を背けず、真正面から向き合つて描くことで、当時の人々だけではなく私たちのような後世の人々にもその様子を伝えようとしていたのではないかと考える。炭鉱で働く人々や戦後の貧しい生活に耐える人が多く描かれていたが、日本画の特徴の顔料によるキラキラして見える質感が、現実とのギャップや相反するイメージを持つていて強く印象に残った。

次に、美術館の建物や展示空間についての印象を述べていきたい。今回訪れた神奈川県立近代美術館は、神奈川県葉山町に所在し、海と山に囲まれた自然豊かな場所に立つ美術館であった。美術館の周りにもゆっくりとした時間が流れしており、都会に立つ美術館が持つ喧騒の中の静寂という非日常空間とはまた違った落ち着きや静かさを感じる空間であった。自然に溶け込むようなシンプルで明るい外観で、美術館特有の重々しさがないため、誰でもより気軽に立ち寄つて芸術作品に触れることができると感じた。また、ホワイトキューブという展示方法で、作られた年代順に作品が展示されていたため、作品の時系列や時代背景の変化が分かりやすかつた。スケッチブックの見開きページやエレベーションなど下絵の段階の作品も展示され

ていたことで、朝倉摂の写実力の高さがより顕著に見えた。

作品を全て見終わって出口に向かう途中に、朝倉摂自身の写真が飾られていた。こんなに明るくて奇麗な女性が描いていたのだなとこれまでの作品と彼女の生涯がリンクしたようで印象に残った。よくアーティストは孤独な人が多いと言われているが、彼女は人と関わることや人そのものにとても関心があったという印象を受けた。また、どの作品からも大きなエネルギーを感じた。その中には、彼女の創作に対するエネルギーと作品に描かれた人々が持つエネルギーの両方があるのではないかと考えた。そして、戦後の苦しい状況の中で絵を描き続けるとはどういうことなのかということを考えさせられた。これは、朝倉摂自身も悩み苦しんだ問いなのではないかと感じた。そして、彼女は、絵を描くことを通して厳しい現実にも希望を見出そうとしていたのではないかと感ずた。同時に、彼女の作品を鑑賞して、苦しい状況の中でも描きたいという正直な気持ちは向き合いで、多くの作品から挑戦やエネルギーといったイメージを感じた。彼女の好奇心や信念のおかげで、多くの作品から「好き」といふ言葉をとことん貫いていたのではないかと感じた。彼女の「好き」



ゼミ生の集合写真

秋葉原見学レポート

国際日本学部 日本文化学科 3年 松本 悠里圭

10時半に秋葉原駅に集合し、秋葉原駅周辺のオタクカルチャーや詰まつた部分を散策しました。散策時、

広告の種類が渋谷や東京駅などとかなり違うことが印象に残りました。振り返ってみると、広告含めガチャポンやBGMなど、中心に据えられているキャラクターや歌手は、女性のものが多かつたように思います。

電気街と呼ばれている地域でも、電子機器以外に売られているタペストリーやポスターは女の子キャラのものが多々、かけられていた音楽も女性が歌手を務めているものだったように記憶しています。対して、JR

秋葉原駅の近くにあるラジオ会館4階のamamiでは、少年漫画などのグッズも多く取り扱っていました。

印象に残っていたのは、電気街のようなキャラグッズの取り扱いにおいて女性キャラが多いテナントでも、

amamiのような複合的な店舗でも、人気アニメ「鬼滅の刃」のグッズが取り扱われていたことです。水着の女の子たちのガチャガチャに混ざった竜門炭治郎ら鬼殺隊の面々は鬼ではなく、何か違うものと戦っているような、長男だから立ち続けられているような、ある種の異様さを感じました。アニメ効果というのは私たちが思っている以上にキャラクターの活躍の場を広げているのかも知れません。

休憩を兼ねて「入国」したためいどりーみんというメイド喫茶は、単身利用のお客さんが男性しかいなかつたことが印象に残っています。また、ゼミ生の一人が「単身では来店しづらい」といった趣旨のことを

聞いていたことから、メイドというカテゴリーがオタ

クの象徴のようではござりません。未だ門戸が

広くひらかれた力

がないのだと感じ

ました。また、来

店時のルールとし

て、離席の際にメ

イドへの声がけが

求められていたの

も、コンセプトカ

フェの特徴を感じました。「にゃんにゃん」の声かけ

の元、メイドさんを呼んでお手洗いに立つというシス

템のものでした。やはりメイドというキャラクター

を消費する商売だからこそトラブルが起こりやすいの

か、トラブル防止に繋がる工夫なのだろうと思いま

した。同じテーブルのゼミ生らがアイスフロートを注文

している中、ひとりオムライスを注文した私ですが、

卵が薄焼きだったことを除けば大変満足なオムライス

でした。卵は半熟が好きです。キッチンは日曜日の昼

ごろと繁忙が予想できるタイミングにも関わらず2名体制。対してフロアのメイドさんは4名は常におり、飲食店と考えると大変心もとないスタッフ体制と感じました。しかし、ここはご主人様の帰国を待ち侘びた



めいどりーみん LIVE RESTAURANT Heven's Gate 店の店員さんと一緒に記念撮影

最後に足を運んだ明治大学内、米沢嘉博記念図書館